

6 次世代を育む環境水族館の挑戦 ～子どもたちの未来を開く水族館～



古川 健
FURUKAWA Takeshi

公益財団法人ふくしま海洋科学館／理事長兼館長

「環境水族館」アクアマリンふくしまは、人と環境との関係を五感で学ぶ場として進化を続けている。体験と実感を重視した展示や教育活動を通じて、子どもたちの環境に対する関心を育み、未来を切り開く力を養うことを目指す、アクアマリンふくしまの特徴的な取り組みを解説する。

生涯学習施設として整備された水族館

アクアマリンふくしま（正式名称：ふくしま海洋科学館）は、2000年7月15日に福島県いわき市小名浜に開館した水族館です。基本理念は「海を通して『人と地球の未来』を考える」であり、単に魚を展示する施設ではなく、環境と人との関わりを学ぶ場として位置づけられています。この考え方は、施設の成り立ちそのものに深く反映されています。

その計画は1978年にさかのぼります。当初から地域振興と教育機能を併せ持つ施設として構想され、1990年頃から本格的な調査と検討が進められました。1994年には基本計画が策定され、福島県教育委員会の所管で「地域に根ざした生涯学習の推進」と「総合的な学習体制の整備」を目的に整備されることとなりました。1996年には設計協議審査会が行われ、株式会社日本設計の案が採用されています。水族館でありながら生涯学習施設として整備された点は大きな特徴であり、開館前の仮称が「福島県海洋文化学習施設」であったことから、その方向性が明確に示されています。



写真1 アクアマリンふくしま

運営の基本方針と展示の構成

アクアマリンふくしまでは、運営の基本方針として三つの考え方を大切にしています。

一つ目は「Microcosm」です。生き物だけでなく、その生息環境を陸上植物や水草、海藻、さらには陸上動物の展示も含めて忠実に再現することで、生命のつながりを感じることでできる展示を目指しています。

二つ目は「Sustainability」です。資源を持続的に利用することの大切さを伝える教育活動を展開しています。



写真2 親潮と黒潮の大水槽

三つ目は「Non-Charismatic Species」です。集客をパンダやラッコのような人気のある生き物に頼るのではなく、サンマやアンコウなど、身近でありながら飼育が難しい生き物の飼育技術を開発することで、それらを展示の目玉としています。

施設の展示テーマは「潮目の海」です。北から流れる冷たい親潮と南から流れる暖かい黒潮によって、福島県沖で作られ「潮目」が、多様な生き物が集まる豊かな海を形成していることを伝えています。

展示には、明確な二つの展示ストーリーがあります。一つ目は「過去から現在、そして未来へ」という時間の流れです。「過去」の展示では、地球誕生から生命の誕生、そして、両生類への進化に至るまでを紹介しています。特に魚類から両生類への進化の過程において重要な位置を占めるシーラカンスの展示や研究に力を入れており、アフリカとインドネシアのシーラカンスを同時に展示している点は世界的にも珍しく、生命の歴史を考えるうえで貴重な資料となっています。

「現在」の展示は、「ローカルからグローバルへ」という二つ目の展示ストーリーで構成されています。福島県内の河川や湖沼から始まり、沿岸部へ、そし

て外洋へとつながる流れをたどることで、地域の自然と世界の海との関係を理解できるようになっています。さらに、親潮や黒潮の源流域に生息する生き物の展示を通じて、海のつながりをより広い視点で捉えることができます。

「未来」の展示は、地球の将来を担う子どもたちの体験学習の場です。ここでは単に生き物を観察するだけではなく、自ら関わり、触れ、感じることを通して学びを深めることを重視しています。自然や生命を「自分ごと」として捉えるためには、知識だけでは不十分であり、体験を通じた理解が欠かせません。当館はその実現のため、五感を使った学びの場を整備してきました。

開館5周年に当たる2005年に、里地の水辺環境を再現した「BIOBIOかつぱの里」と干潟の環境を再現した「JUBJUBひがた」を整備しました。「JUBJUBひがた」は、その後3年かけて磯や砂浜の環境を順次付加し「蛇の目ビーチ」が完成しました。この施設は、来館者が実際に水に入り、生き物に触れながら観察できる世界最大級のタッチプール（現在は、アニマルウェルフェア（動物福祉）の観点から触れ合いは行っていない）であり、「見る水族館」から



写真3 わくわく・はじまりの森で開催した生き物観察会

「体験する水族館」への転換を象徴する存在となりました。さらに、開館10周年には子ども体験館「アクアマリンえっぐ」、開館15周年には森の環境を再現した「わくわく里山・縄文の里」を開設しました。さらに開館25周年には、「わくわく里山・縄文の里」を「わくわく・はじまりの森」に改修すると同時に他の体験展示も改名し、これにより、山から川、そして海へと連なる自然環境を一体的に体験することができ、自然のつながりを身体的に理解できる場となりました。

体験を提供する重要性

こうした体験型の展示を造成してきた背景には、現代の子どもたちを取り巻く環境の変化があります。近年、子どもたちが自然の中で遊ぶ機会は大きく減少しました。川や海に行くことが制限され、生き物



写真5 川遊び



写真4 蛇の目ビーチで開催した潮干狩り

に触れる経験や飼育の体験も乏しくなっています。さらに、命の誕生や死に立ち会う機会も減り、「命」を実感する機会そのものが少なくなっています。このような状況の中で、自然や生命に対する関心をどのように育んでいくのかが大きな課題となっています。この課題に対して、当館が掲げているのが「命の教育」です。これは単なる知識の伝達ではなく、体験を通して生命を理解することを目指すものです。生き物は互いにに関わり合いながら生きており、人間もその一部であること、そして私たちは他の命をいただくことで生きているという事実を、実感として学ぶことを重視しています。

その象徴的な取り組みが、子ども体験館「アクアマリンえっぐ」で開催している釣り体験です。来館者は魚を釣り、目前でその魚が調理される様子を見学し、食べるという過程を体験します。希望する学校団体に対しては自ら調理をする体験も提供しています。このプロセスを通じて、単に「食べる」行為の背後にある命の存在に気づき、その意味を考えるきっかけを得ることができます。命をいただくとはどういうことか、自分たちの生活がどのように自然とつながっているのかを、頭だけでなく身体で理解することができるのです。

また、こうした体験は、自然との距離を縮めるだけでなく、持続可能な社会を考える出発点にもなります。資源をどのよ



写真6 釣り体験

うに利用し、どのように守っていくのかという問いは、日々の生活と切り離すことのできないものです。体験を通じて得られる実感は、環境問題を自分自身の問題として捉える力へとつながっていきます。

新たな運営目標と今後の歩み

2011年に発生した東日本大震災と原発事故の影響により、当館の入館者数は大きく減少し、その後も低調のまま回復していませんでした。さらに2020年以降の新型コロナウイルス感染症の影響により、運営は一層厳しい状況に直面しました。この状況を改善するため、2021年に新たな運営目標を定めました。それが「子どもたちの未来を開く水族館」「唯一無二の水族館」「地域と共に歩む水族館」です。第一の目標は、次世代を担う子どもたちに対し、自然や環境に対する関心を育み、未来を切り開く力を養うことです。第二の目標は、アクアマリンふくしまでしかできない体験や展示を通じて、独自性の高い水族館を実現することです。第三の目標は、地域と協働することで、共に発展していくことであり、地域の活性化にも貢献することを目指しています。

現在、動物園や水族館に求められる役割も大きく変化しています。従来、水族館は地域観光の集客を

担う観光施設や娯楽施設として位置づけられてきました。しかし、動物やその動物が生息する自然環境の保全を担う施設として「種の保全」「教育」「調査研究」「レクリエーション」といった多様な機能が求められるようになりました。当館では、これらの役割を総合的に担いながら、新しい時代にふさわしい水族館のあり方を模索しています。

アクアマリンふくしまが目指しているのは、訪れる人々、とりわけ子どもたちにとっての「自然への扉を開く」場となることです。館内での体験をきっかけに、実際の自然へと関心を広げ、自ら学び、考え、正しい認識と責任ある行動をとることができる人材を育てることが重要です。そのような学びの積み重ねが、将来の環境保全や持続可能な社会の実現につながっていくと考えています。

海を通して人と地球の未来を考えるという施設の理念は、時代が変化する中であっても、その重要性を増し続けています。アクアマリンふくしまは、教育、研究、そして地域との連携を柱に据えながら、この理念を具体的な形として実現する場であり続けようとしています。今後も、多くの人々にとっての学びと気づきの場として、その役割を果たしながら歩みを進めていこうと考えています。